

鐘金

七の  
が  
た  
り

奥野泰弘

▶ 静かに解体の日を待つ長泉寺現鐘楼



## はじめに

この戯文<sup>ざれづみ</sup>を草するに当って、題名をいかに付くべきか、実は、今も大いに迷っているところです。もとより『ものがたり』でありまして、必ずしも史料に基づいたものではなく、むしろ、私の当て推量が殆どかも知れませんが、取り敢へず仮題を上記のよう<sup>う</sup>に定め、思いつくままに、ぼつぼつ書いてみることに致しました。

尚、ここで云う鐘とは、所謂、梵鐘一般ではなく、当長泉寺の鐘をさします。



当長泉寺の梵鐘のことに就きましては、さきに「当山の鐘楼並びに梵鐘について」なる一文を草し、昭和五十五年七月十六日の定例役員会の際、出席の役員各位に配布申し上げ、更に若干の修正を加へて、その寫<sup>うつ</sup>しを昭和五十五年十一月二十七日付、当寺々報に掲載し全檀信徒各位に配布申しあげてあります

ので、これを御覧下されば、まことに幸いでございます。

又、去る昭和二十四年十二月十三日、現在の梵鐘が台山より移管されて撞初式を行った際、先住説宗方丈が、ガリ版刷りにして参列の各位に御配布申し上げた「梵鐘の由来」なる短文が残って居りますので、ともに収録いたしました。どうぞ御参照下さい。

### 当山の鐘楼並びに梵鐘について

当長泉寺には、藩政時代すでに鐘楼があったことは、当寺が所蔵して居ります延亨三年（一七四六年）版の古伽藍図よりしても容易に想像されるところであります。尤もこのときの鐘楼は現在地の反対側、即ち山門を這<sup>は</sup>入つて右測に在ったと思われま<sup>す</sup>。が、ご承知の通り、その後、当寺は文政十年（一八二七年）、明治元年（一八六八年）の再度に亘り失火の為全焼し、又、古記録等も殆ど伝わって居りませんので、この時代の鐘楼並びに梵鐘の様式・規模等は窺い知るべくもありませんが、とにかく文政十年の第一回火災後、長らく鐘楼は再建されずに居ったの

であります。

当山の先住是祥方丈は明治二十七年に岩手県東磐井郡興田村龍門寺より普住された方ではありますが、かかる名刹めいさつに鐘楼のないことを残念に思い、大正八年（一九一九年）畢世ひつせいの事業として、これが再建を発願し、自ら京都に出向いて重さ壹百貫の梵鐘を購入入、かたわら浄財を募って現在見るが如き鐘楼を再建し、大正九年秋、盛大な落慶式並びに撞初式うちぞめしきを行い、爾後一カ年を出でずして大正十年十月五日、世寿六十五才を以て卒然として遷化されたのであります。この鐘は、その後お寺の鐘として地区民の方々に親しまれ、除夜は言うに及ばず朝な夕なに、寺から里へと法音を伝えて参りましたが、戦争が激しくなるにつれ、昭和十八年、金属供出の憂き目にあつて応召し、ついに帰ることなく、終戦を迎へたのであります。



扱さて、当長泉寺の開基石川家の角田第四代（通算は二十七代）の館主は石川宗弘公と申される方ではありますが、この方が梵鐘を氏神八幡神社に奉納して郷内安全を祈願されたことが『石川氏一千年史』に記録されて居ります。即ち同史下巻三十二丁に

「寛文元年（一六六一）八月六日鐘を鑄る地金二百七十八貫二百目江戸ヨリ鍋屋又兵衛ヲ招キ觀音堂山下ニ於テ制作し工成リ之ヲ氏神八幡社ニ納ム」と

あります。この鐘は、その後明治維新の変革に際し、官軍の進攻を恐れた家中の方々の手によって、一時八幡神社下のお濠深く沈められたものを、間もなく引き揚げ安養寺の跡の竹藪に放置されてあったと云われて居りますが、町政施行前後、台山に鐘楼を建ててここに吊し、爾来、台山の鐘として町民に親しまれることになったのであります。併し時勢の推移に伴い、又、サイレンの普及によって、いつしか時鐘としての役目も終り、其筋の指示もあって久しく鐘声を聞くこともなく終戦を迎へることになった訳でございますが、幸い、万一サイレン故障の際の非常用ということ供出をまぬかれたことは、関係者の御努力によるものと存ぜられ、敬服に堪へぬところでございます。

台山の鐘楼は至つて小規模のもので、破損の度合もはげしく、追い追い危険になった為、昭和二十四年、先住説宗方丈の熱願と有志並びに篤信の方々の並々ならぬお力添へによつて当寺に移管されることになり、しばらく空楼だった当寺の鐘楼に移されて、ここに台山の鐘はお寺の鐘として生れ替り、今日に至つてるのであります。



俗に「堂を見て鐘を吊せ」と申す諺ことわざがございます。これは鐘の大きさと鐘楼の大きさとの間には一定の比率・公式があるという意味だと存じますが、前に

も申し上げました通り先住是祥方丈が新鑄した二代目梵鐘は百貫足らずのものであり、現在の鐘楼も当然それに釣り合った寸法で建てられたものであります。一方、只今の第三代梵鐘は用いられた地金の総量からして推定貳百二・三十貫はあろうかと存ぜられます。専門家の話では現在の鐘楼は、当然鐘との釣合は不均衡で、鐘に対し柱間で約一尺五寸せまいたのことです。のみならず現在の鐘楼は柱が杉材の為、一部は既に根継ぎしたものもあり、只今、柱の長さ十八尺の間で約八寸東へ傾いて居り、しかも、年々僅か乍らこの傾きがひどくなって来て居りまして、それ丈け危険の度も増して来ている訳でございます。

かかる次第で、早晚どうしても鐘楼を改築しなければならぬ時期が参りますが、幸い、今春の僧堂落慶に際し、近近の鐘楼改築を見越して、余剰金六百三十余万を以て主要樑材の一部を購入して、将来にお備えいただきましたことは、返す返すも有難いことに存ぜられ御礼の申し上げようもございません。



転勤等で初めて当市に居住された方々の多くは、鐘の聞こえる町として当地を慕い、やがて深い愛着を持って下さると聞いて居ります。

檀信徒皆々様の信仰心と愛郷心により、適當の機会に鐘楼を改築して、三百十数年前に名君宗広公

によつて此の地で鑄造され、又、年輩の方々には台山の鐘として親しまれ、戦後は長泉寺の鐘として生まれ替わつたこの名鐘を安全に奉安して、よろこびと感謝のうちに、朝な夕なにいつまでも鳴らし続けて参りたいものと念願して居ります。

(昭・55・11・27長泉寺護持会発行諸報告より抜粋)



以下は先住説宗方丈時代、昭和二十四年に、所謂「台山の鐘」が当寺に移管され、今年十二月十三日例歳御開山忌に併せて撞初式を行った際、ガリ版刷りにして参列の総代・世話人及び来賓各位に配布したものの、寫しである。後世の為再録しておく次第であります。

尚、文中、松岡丈右衛門とあるのは鍋屋又兵衛と同一人物であり、元禄年間云々は先住の記憶違いと思はれます。(昭・58・6・13泰弘記)

### 梵鐘の由来

本日撞初めの式典を挙げ、改めて長泉寺の鐘として、平和招來の為に再出發したこの梵鐘には、由来因縁の深いものがあることと存じますが、御覽の通

り一字一句の鐘銘も彫込まれて居らず、また之に関する文献とても見当らず、誠に遺憾なこと乍ら、その詳細を知ることとは出来ません。が、地方の伝説や又、ある信ずべき筋の聞き伝へを綜合致しますと、今から約二百五十年前、即ち元禄年間に、當町の鑄物師松岡丈右衛門が、館主石川家の命を承け、郊外野田の觀音堂山に於て、精魂を傾け名鐘の製作に専念し、奥方また之を扶けて、手づから金銀等を炉鞴に投じ、遂に、口径二尺八寸、高さ五尺三寸、重量二百八十貫と云ふ巨鐘の鑄造に成功した結果、石川家に於ては、深くその労を犒ひ、この巨鐘をば八幡神社に奉納して、領内の安全、五穀の豊穰を祈願したと云ふことであります。

然るに明治維新の際、官軍の角田に進撃すると聞かや、當時の人々がこの巨鐘の奪取せらるゝのを恐れてか、社前の大濠に放り込み、水中深く隠匿したものゝを、更に明治某年、之を引き揚げて台山に移し、爾来、時を報ずるの鐘として、角田町民は云ふに及ばず、近郷近在の人々にも親しまれ、私共の日常生活と堅く結びつき、角田と鐘の音は離れ難きものとなつてゐたのでありますが、戦争の酷なるに及んで、鐘の音も響かず、終戦後の今日、尚且つその名音を聴くことを得ず、深くも印象づけられてゐた「台山の鐘」の名も漸く忘れられんとして、心あるものは一沫の寂しみを感じてゐたのであります。

當寺にも梵鐘はあつたのですが、戦時中金属回収の命を受けて供出し、以来、空楼のままに成つて居りましたので、一は皆様の要望に應へ、一は幾分でも国家再建に役立ちたいと云ふ念願から、再度、町に御願ひ申上げた結果、角田町の御好意を得て、その移管を認められ、茲に改めて「長泉寺の鐘」として、平和招来の第一線を承はり、威容堂々と再出發致した次第で御座います。

願はくは、鐘の音高らかに打鳴らして、相共に情操を涵養し感謝報恩の行持にいそしみ、国運復興の警鐘ともして、歓喜和楽の国土建設に御精進せらるるやう、特にこの機會にお願い申し上げます。

昭和二十四年十二月十三日

長泉寺住職 奥野 説 宗

扱、『石川氏一千年史』に記載されて居ります梵鐘鑄造に関する記述を改めて引用すれば、

「寛文元年八月六日鐘ヲ鑄ル地金二百七十八貫二百目江戸ヨリ鍋屋又兵衛ヲ招キ觀音堂山下ニ於テ製作シ工成リ之ヲ氏神八幡社ニ納ム」(石川氏一千年史下卷三十二丁)

の通り、極めて簡単なものでありますが、右の記述



▶ 現在の観音堂山

(角田市・野田)

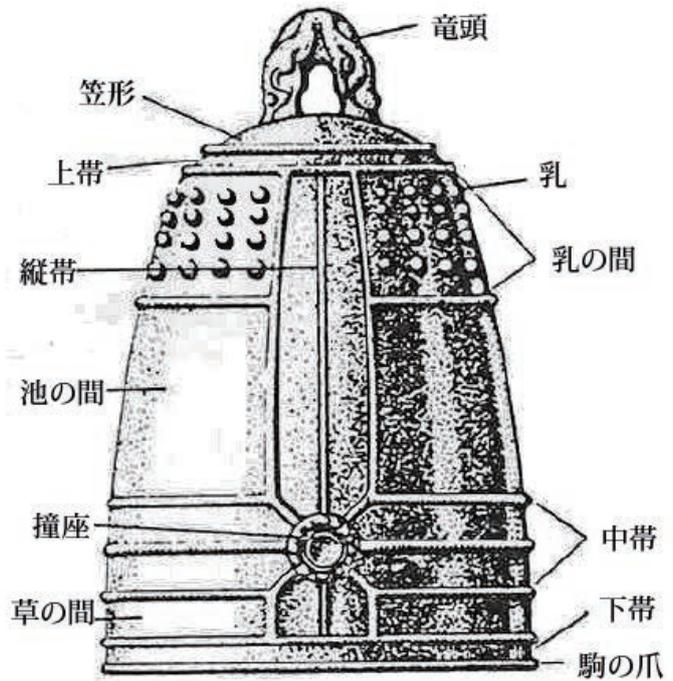
以外に二三の言い傳へが残って居ります。

梵鐘鑄造の発願主は、申すまでもなく角田第四代の館主石川宗弘公であります。このかげには奥方様の厚い手助けがあつたといはれて居ります。奥方は京都水無瀬中納言の御息女梁姫と申される方で、明暦三年（一六五七年）入興されましたが、生来信心ふかく尊い御身であり乍ら鑄造にあたっては、たびたび観音堂山下の鑄造場にお成りになり自ら炉鞴に金銀を投じて工事の安全を祈念されたということです。因みに、この梵鐘には文字は一字も刻まれてなく、わずかに直径一尺八分の法輪が四ヶ、草の間（梵鐘各部の名称図参照）に鑄出されているにすぎません。この小さな四個の法輪に、私は、むしろ奥方様のつつましやかなお心と、気高いお姿を見る思ひがするのでございます。

✽

又、この鐘を鑄造する為に、わざわざ江戸から招聘された葺師鍋屋又兵衛は、その後江戸に帰ることなく当地にとどまり、松岡姓を名乗り、子孫はその後、本町（現在の角田市農協あたり）に居住して、

▼梵鐘各部の名称（和鐘）



代々鑄造業に従事し、最盛期には夜分などタタラ（足踏み式の大型の鞆ふいし）をふむ火色が、夜空に映えて遠く横倉あたりからも望見されたといはれて居ります。しかし、その後いつしか稼業もやめ、大正五年四月八日の昼火事で屋敷も類焼し、現在、御子孫は岩沼に住んで居られます。

尚、これは全くの余談になりますが、当時鍋屋松岡家の庭には、見事な帆かけ舟松があったそうです。出入の植木屋さんが庭の手入れをした時、入り

船とすべきところを、うっかり出船にしてしまい、これを見たご近所の方々が、何ごともなければよいがと噂し合っていた矢先の災難だったとも言われて居ります。



度々、申し上げたように、現在の長泉寺の梵鐘は寛文元年（一六六一年）角田第四代の館主石川宗弘公の発願によって鑄造され、氏神八幡社に奉納されたものであります。八幡社時代の鐘楼がどのあたりに在ったか、今のところ不明であります。

山頂の拝殿・本殿のあります平坦地とも思われますが、ここは狭隘きょうあいとは言へないまでも、とても鐘楼を建てるような余裕はなさそうであります。

結論から申しますと、楼門（隨身門）の向って右手前（現在の社務所のあるところ）に鐘楼があったのではないかと思うのです。

現在の社務所は、終戦後、八幡神社代々の宮司吉田家の当主充義氏が東京に移住された後、氏子の方々が協議の結果、急ぎ建築されたものであります。同社の兼務宮司佐藤清茂先生、氏子総代長菅野敏夫

氏、同社とゆかりの深い地元の長老石川好光氏らの言によれば、問題の場所は社務所建設（社務所建設は昭和四十年）以前すでに平坦地で、又、広さも鐘楼を建てるぐらいいは十分であり、「官軍の進攻をおそれた家中の方々の手によって、一時お濠の水中深く沈められた云々」の言い傳へにも暗号する場所ではないかと思うのです。

この鐘が町の時鐘として台山に移された正確な年代は、遺憾乍ら大正四年の大火の際町役場も全焼し、記録が残って居らず、今のところはっきりして居りません。

併し乍ら、はじめ、町役場の依頼をうけて、当時北町でうどん屋をしていた有馬屋さん（三由氏・御子孫は北海道札幌市住）から鐘つきを引き継いで以後、長年月に亘りこのことを勤めてこられた、台山下の中村家の当時の夫人まつよ様は、昭和九年五月四日、行年七十八才を以て死歿されましたが、病いが重くなつて来たとき、ある日「あゝ、わしも五十年鐘を撞いた」と家人に申されたことがあった相です。従つて、もし、まつよ様の言う通りであれば昭和



▶ 現在の八幡社（角田市・谷地町）正面は隨身門、右側が社務所。この社務所のところには鐘楼があったと思われる。

九年の五十年前は算えて明治十八年に相当することとなり、更に、その前に有馬屋で撞いた若干の年月があれば、矢張り現在の結論としては、明治十七年の連合戸長制度施行前後、ということになるのではないでしょうか。

✽

日頃、親しく御交誼をいただいている、ある神社の宮司さんと世間話をしていた時、たまたま、寛文元年鑄造の梵鐘のことに話が及びました。その時、宮司さんの仰有るには「梵鐘を奉納しようとする場合、神社と寺院のどちらに、ということになれば、二対八ぐらいの割合で寺院に奉納することが多いのではないか。神社に法輪は一寸似合はないような気がする」とのことでした。

さきにも申しました通り当山は文政十年（一八二七年）の第一回大火で全焼して居り、古記録も残って居りませんので寛文元年（一六六一年）当時、既に当山に鐘楼があったか、なかったかは記録の上では確めることは出来ません。が、幸い当寺には、曾てある時期さる町家に保管され、先住説宗方丈の

代に寺に奉納された延亨三年（一七四六年）版の古伽藍図が所蔵されて居ります。これによると禅宗寺院建築の作法上、鐘楼のあるべきところに小屋らしきものが描かれて居り、延亨年代かそれ以前に既に当山には鐘楼があったと推測・結論せざるを得ません。更に、このことは、現在、寺に残って居ります大正九年新鑄の梵鐘（後で述べますが、この鐘は昭和十八年金属回収令により供出し、今はありません）の銘文の寫しからも、容易に想像されます。この鐘銘の案文は左の通りでありました。

### 梵 鐘 銘

當寺石川家香華院 故殿堂伽藍完備

某年有火歸烏有 梵鐘亦燒失

以無法器為憾 余化檀徒範鑄之以簾棲上

因為銘曰

開張炉黼 現出梵鐘

口包法界 身掛虛空

響徹十方 直證圓通

日施號令 立不宰功

大正九年初秋

長泉三十九世是祥老柄

（傍線筆者）



つまり、本来なれば、菩提寺長泉寺に納むべきところであるが、長泉寺には既に梵鐘があるので氏神八幡社へ、ということになったのではないか—そうとも思へるのです。

いかに神佛混淆しんぶつこんごうの時代とは申せ、この梵鐘に鑄出されている四ヶの法輪も、そう思ってみれば何やらもの言いたげに見えて参ります。



戦前——昭和十八年に当寺のさきの梵鐘が金属供出の憂き目に逢うまでは、角田の町には朝夕、台山と長泉寺と二つの鐘の音が響いていたわけです。尤も、台山の鐘は午前六時から午後十時まで一時間ごとに、長泉寺の鐘は所謂、暁鐘・昏鐘こんごうで朝夕各々九つづつ、鳴らす仕来りでしたが、二ヶ所の鐘の音を今も覚えている年輩の方々の中には、「どうも長泉寺の鐘の方が、音が良かったような気がする」と云う方も居られます。

現在の長泉寺の梵鐘（旧台山の梵鐘）は、重量に比し余韻が少ないのは事実でございますが、この梵鐘の音色が果たして本当に良くないのか、若干でもヒ

ビが這入っているのかどうかは、勿論、専門家の鑑定を俟たなければなりません。が、若しいくらかでもヒビが這入っているとすれば、次の二つの言い傳へが想起されます。

一、あるとき角田に大火があり（文政の大火か、とにかく不明ですが）、何時間も早鐘を鳴らしつづけ、ふと気が付いてみたら、鐘が大分熱をもっていたので、あはてて水をかけたところ、そのトタンにヒビが這入ったという説。

二、明治初年、官軍の角田進攻の際、梵鐘の破壊されることを恐れた御家中の方々が、急ぎ鐘楼より鐘をおろし、八幡社の急坂をゴロゴロと転がしおろして、真下のお濠に鐘を沈めかくした。そのときヒビが這入ったとする説。

以上、勿論真偽のほどは解りませんが、話として御紹介申し上げた次第です。



扱さて、又々、話のような話になりますが、寛文元年この鐘が鑄られたとき、実は鑄造された鐘は一つではなく、三つだったという話が伝はって居ります。

尤もこのことは勿論『石川氏一千年史』にも記載されて居らず、又、信ずべき資料もなく、単なる言い伝へ——それも極く一部の——にすぎません。

その言い伝へによれば、この時一度に大中小三個の鐘を葺き、大を八幡社に中を刈田嶺神社に、又、小を愛宕神社に奉納したというのです。

『石川氏一千年史』の記述によれば、梵鐘鑄造の際、用いられた地金の総量は二百七十八貫二百匁とありますし一方、現在の梵鐘は推定二百四・五十貫ぐらゐと思はれますので、この一事から見ても、同時に三つの鐘を葺いたとはとても信じられません。世の中なんでも勉強と思ひ、一日（昭・58・6・28）まず刈田嶺神社に参拝してみました。

刈田嶺神社は別名白鳥神社ともいはれ、蔵王町宮の郊外の、樹齡數百年と思はれる老杉・巨木に囲まれた小高い丘の上にあり、長い石段を登りつめた広い境内には、江戸中期ごろの建造にかかる拝殿、本殿、隨身門、鐘楼、それに社務所、水屋等が整然と立ち並ぶ、地方では珍しい、素晴らしいお宮様で、主要な建物はすべて見事な彫刻で飾られ、又、「白

鳥の碑」のあることでも有名であります。

参拝をすませたあと、佐藤宮司さんに御目にかかって、いろいろお話を承はり、神鐘も拜んで参りました。現在の鐘は昭和二十七年十月の再鑄で、龍頭下高さ三尺七寸、口径二尺三寸、へり厚約二寸一分の仲々立派なものでした。

初代梵鐘は貞亨二年（一六八五年）領主片倉小十郎村休公の奥方が寄進されたものの由であります。惜しいことに昭和十八年八月、大東亞戦争の軍事資材として供出させられてしまったとのこと。寛文元年（一六六一）は貞亨二年（一六八五年）の二十四年前であります。前後の事情からして、石川公が刈田嶺神社に梵鐘を奉納したとは一寸信じ難く、後日の参拝をお約束しておいとまして来た次第でした。

愛宕神社は当市横倉前沖に鎮座のお宮様で、渡辺宮司さんには、日頃、何かと御指導いたゞいて居る間柄であり、何度もお伺いしてお話を承って居ります。神社の拝殿・本殿敷地の東方に広場があり、更に広場の一番東の一段高いところに、俗に、鐘楼あ

とと云はれている一劃いっかくがございます。

只今も礎石あとが歴然として残って居りますが、渡辺宮司さんのお話では、いつごろ鐘楼が建ったものか、又、いつごろ鐘楼がなくなったものか、今のところは不明であり、勿論、石川公が梵鐘奉納云々の話も聞いていないとのことでした。

以上の二点を総合的に判断しますと、寛文元年に三個の鐘を一度に葺いたという話は、現在としては、矢張り話のような話ということりなりそうでございます。



一体、お寺の鐘はいくつ撞くのか、九つに聞こへることもあるし、又、八つに聞こえることもあるが、と云う御質問をよく受けることがございます。

ここで最初に先ず御説明しておかなければならぬのは、お寺で撞く鐘は所謂、時鐘ときがね（ときの鐘）ではないということです。

では、時鐘とはどう云ふものかと云へば、戦前、台山の鐘が毎日午前六時から午後十時まで、一時間ごとに六時には六つ、十時には十声と中村のお婆ちゃ

んによって鳴らされていた、あの鐘はまさしく時鐘でした。なつかしい限りです。

台山の鐘は、はじめ、有馬屋さんがしばらく撞き、のち、台山下の中村家に引き継がれ、中村さん宅では爾後、三代に亘って（故中村まつよ・昭・9・5・4 歿78才故中村さわ・昭・14・1・28歿59才、現たけよ夫人）各夫人方が、昭和十九年に警察から中止命令が出されるまで、鳴らしつづけられたのだそうです。

それにしても、一年三百六十五日、雨の日も風の日も、休むことなく早朝から深夜まで一時間ごとに、時を報じて下さったその御労苦は、なみ大抵ではなかつたと思はれますし、最終的に（昭和十九年代）町役場から、鐘撞きのお手当として頂戴していたのが、月々金七円だったと聞いては、ここでも隔世の感を深くせずには居られません。



扱、之に対し私共曹洞宗の場合、鳴鐘に就ては飽くまでも佛道修行の一環として定められた方式があり、これに依頼している訳ですが、まず禅門の鳴鐘

の種類として日分に於ては暁鐘・日中鐘（午ごろの鐘）昏鐘・開枕鐘（夜ねるときの鐘）の四つに大別されます。又、年分としては除夜鐘。それに住職の晋山式・荼毘式（本葬）等、寺の重大儀式の際の臨時鳴鐘、更には、早鐘といましようか寺の内外・近隣の火災等、非常の際の鳴鐘等に分けられますが、毎日恒規に撞く鐘でも、日中鐘・開枕鐘は現在では大本山等の大寺院以外は殆ど撞かれて居らず、当山のような地方の小寺院では、暁鐘（あけの鐘）昏鐘（くれの鐘）だけが撞かれていると云つて宜しいと存じます。

暁鐘・昏鐘はもとより、時の鐘ではなく、暁鐘は朝課諷經（あけ方のお経）の前、昏鐘は晚課諷經（夕がたのお経）の終つたとき鳴らすのが作法で、大体、日の出・日の入ごろにも当る訳ですが、当山では便宜上、暁鐘は一年を通じて午前五時、昏鐘は夏期間は午後五時、冬期間は四時半と定めて居ります。

そこで一回に撞く鐘の数でございますが、これは佛教では百八煩惱と申しまして、我々凡夫の悪い考へには百八の種類があると教へて居ります。この百八

の悪い考へを、鐘の一聲一聲で撞き潰すという願いから、一回百八聲が正規となつて居ります。併し實際問題として朝夕ごとに百八聲の鐘を鳴らすのも大変でございますので、この百八が割り切れる数でも宜しいとされて居ります。つまり半分なれば五十四聲、三分の一なれば三十六聲、六分の一なれば十八聲、十二分の一なれば九聲、いずれも正しいということになります。

当山では、除夜に丈け百八聲を打ち、平素は十二分の一の九聲を鳴らすことにして居りますが、何聲の場合でも打ち切り前の一聲を擬聲（所謂、捨て鐘）と申しまして、少しひくく鳴らすのが作法です。つまり、最後のところは<sup>㊸</sup>ゴン、<sup>㊹</sup>ゴオンとなる訳です。遠方の方や又は風の向きによつては、この少し小さ目の捨て鐘が、聞こえたり聞こえなかつたりして、八つだ、いや、九つだということになるのだと思います。



百八と云へば、梵鐘には上部に乳の間まと称されるところがあり、ここに乳（俗に云うイボ）が付いて

居りますが、近世鑄造される梵鐘の乳の数は殆ど百八個でありまして、これも百八煩惱を表はしているものと思はれます。

鐘乳の数が百八つと云うのは、江戸期の頃、大阪の我孫子鑄物師が工夫創案して以来定着したもので、古鐘の場合には、全く乳のないものもあり、又、乳の数も必ずしも定まつて居りません。

因みに当山の梵鐘は寛文元年（一六六一年）の鑄ま造で、乳の数は五段五列四間まで合計百個でございます。

鐘の乳は、音響上の効果が果してあるのか、又は単なる鐘全体の美観の為に付けられたものか、遺憾乍ら素人の私には判りませんが、矢張り音響上の効果も若干はあるのではないのでしょうか。



鐘の公休日などと云う馬鹿なことがある筈ありませんが、当山では年中行事の一つとして三朝祈禱大般若会が毎年、元日より三日間、毎早朝に厳修されて居ります。

元朝には除夜鐘も含めて百八聲、二日目と三日目

には午前三時半より七十二聲を夫々二度に分けて打つならはしとなって居ります。そこで当山では三日間、鐘に御苦勞をおかけしたと云う意味で、毎年、一月四日の暁鐘（明けの鐘）丈けは撞かぬことにして居ります。云うなれば、これが当山の年一回の鐘の公休日ということになりましょうか。

ほかのお寺様では、どんな具合にされているか興味あることですので、追いつ追いつにお聞きしてみたいものと思つて居ります。

数多いお寺様の中には、鐘にも寿命があるのだから、矢鱈に撞くべきものではない、と云つて朝晩一聲こえづ、しか撞かない方がありますが、これも一理ある面白い話です。



扱、別項で申し上げた通り、現在の長泉寺の鐘はもと台山にあったものでありますが、この鐘が当寺に移管されるに至った事情は、大凡左の如きものであります。

終戦後、台山の鐘はその妙音を響かすこともなく、いたづらに時月のみ経過し、鐘楼も次第に破損して

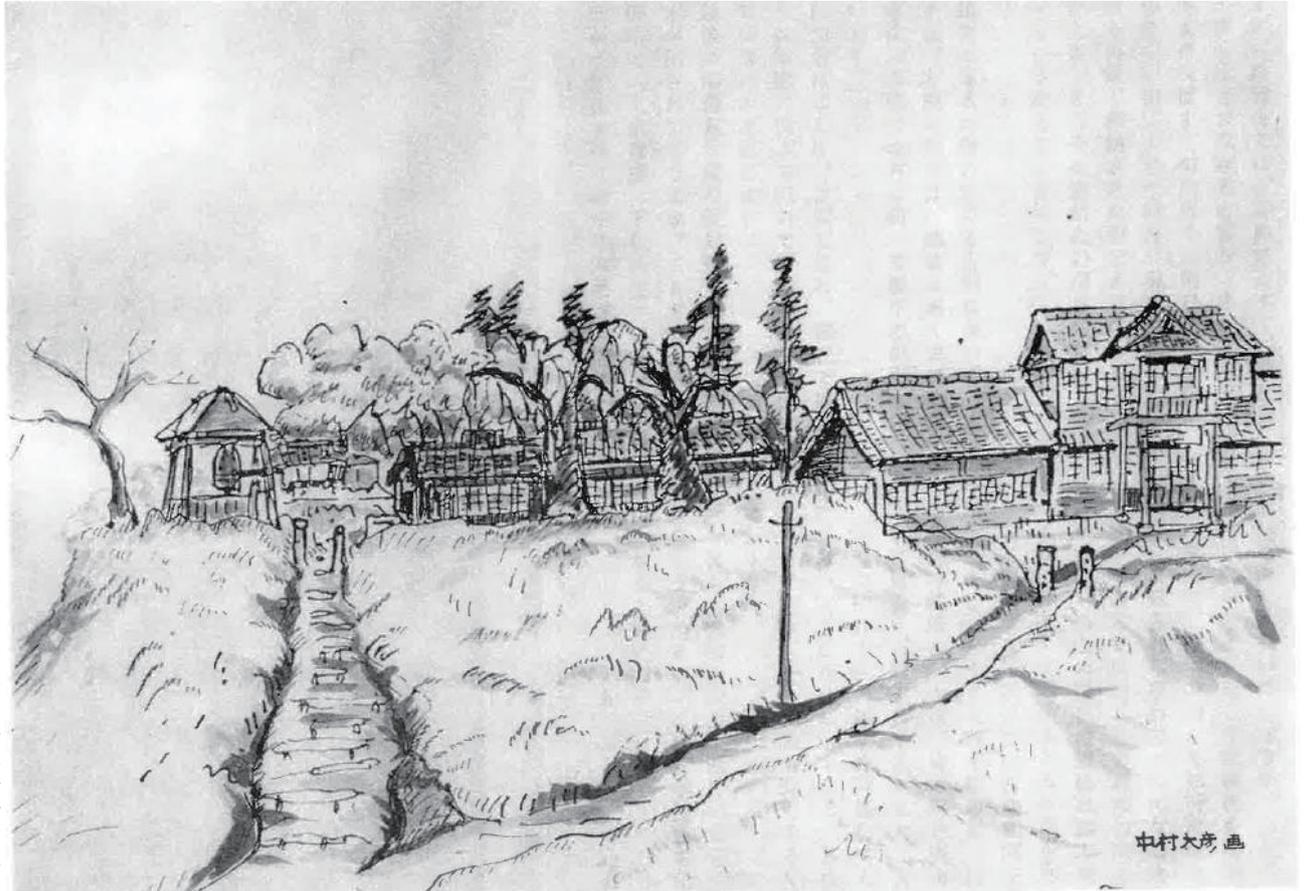
追い追いには危険にすらなつて参りました。その頃、鐘樓のすぐそばの民家に仮住まいされていたのが、今は故人となられた中村勝彦画伯でありました。この中村先生や地区の代表の方々が、再三、町役場に出向いて、台山の鐘樓の実態を申し述べ、然るべき善処かたを要望されたのが、抑そもそものキツカケであります。

町の方でも、この処置に就てはいろいろの話があったと思はれますが、追い追いこの話を伝へ聞いた斗蔵寺（角田市小田）と当長泉寺が、凶らずも競願のような形になり、殆ど同時ぐらいに、梵鐘の払い下げを申請したのであります。尤も、後で聞いた話ですが、もともとこの鐘は町の財産台帳には記載されていなかつたそうではありますが……。

町当局も両者の請願をうけて大いに困惑されたと思はれますが、幸いにも当時の佐藤貞治町長さんや、その他大勢の関係各位の並々ならぬ御盡力ごじんりよくによつて、とにかく、近くの方へということになり、当寺に払い下げられることになったのであります。時に昭和二十四年秋の頃でありました。

寺では勿論先住説宗方丈が元氣な頃で早速受入れ態勢を整へ、今も御健在の菅野敏夫総代さんの立会いのもと、当時名題のテコ師角田東田町佐藤善太郎さん（故人）を招いて「鐘の引越しは大仕事と思うが、寺の為、一世一代のつもりでやってくれぬか」と頼みこんだところ、即座に御快諾、殆ど実費同然での難作業を無事すませていただいた次第でした。當時は、あまり機械力もなく殆ど人力で、道具もロープ、滑車、道板、ジャッキ、ぐらいのもので、さぞ大変だったことと思いますが、とにかく、こうして台山の鐘は無事、長泉寺の鐘樓に移され、同年十二月十三日、例歳御開山忌に併せ、撞初式が盛大に行はれたのでした。尚、台山の鏡樓は鐘を運び出すと同時に取りこはされました。

少々余談になりますが、斗蔵寺の鐘も御同様戦時中、供出の憂目にあいましたので、それ丈けに、當時町会議員だった齋藤佐蔵翁や小島善雄氏、岸浪今朝一氏等を代表とする、斗蔵寺関係の方々の、台山の鐘払い下げ運動も全く真剣且つ熱心なものでした。まあ、結果として二者のうち、当寺が払い下げを



▶ 昭和十九年頃の台山の風景  
左端に鐘楼が見える  
(丸森町館矢間南木沼  
中村太彦氏画)

受けたわけで、斗蔵寺様には申し訳ないような気がいたしますが、斗蔵寺では、このあとすぐ、前記齋藤・小島・岸浪氏等が発起人となり、小田・豊室・老ヶ崎は申すに及ばず、町内外その他ひろく一円から浄財を募り、昭和二十七年四月、現在見るごとき立派な梵鐘を再鑄、奉納されたのでありまして、信仰の力の偉大さ、またその御信心の深さには今も敬服申し上げている次第でございます。



ここで鐘楼の撞木しゅもくの向いている方向に就いて一言いたしますと、古規に則れば、梵鐘はあくまで法器であり、本堂（本殿）の方に向って撞くのが正しいとされています。

併し、いつとはなしに、古規も乱れ、現在では、本堂若しくは本殿に撞木の向いている鐘楼は全国で半数以下ではないかと存じます。

当山の鐘楼の場合も古規の反対側すなはち、東を向いて撞木が吊されて居ります。ここで考へられることは、佛語に「上求菩提じょうくぼだい・下化衆生げしゆじやう」とあり、若し本堂に向かつて鐘を撞くのが上求菩提道であり、

その裏は下化衆生道であると解すれば、これも亦許されるのではないでしようか。

いづれにせよ、若し今度鐘楼を改築させていただいた場合に、撞木の向きを如何に定めるかは、私の決断を求められる事柄の一つになると思います。

更に、御本堂に対しての鐘楼の向きに就いてであります。当山の現在の鐘楼は御本堂に対して平行、つまり、御本堂も鐘楼ともに東を向いて居ります。

一方、延亨三年版の当山古伽藍図を仔細に点検いたしますと、どうも文政十年の第一回火災で焼失した最初の鐘楼の向きは、御本堂と直角を為していたように見受けられるのであります。（古伽藍図参照）各地の神社寺院の鐘楼を拝観しても、どうも、これには一定の定めはないようで、各社寺によってマチマチであり、その割合も殆ど半々ぐらいではないでしようか。

今後もし鐘楼を改築させていただく場合、その向きをどう決めるか、これも亦決断を要する事柄の一つになると思います。



当山の鐘楼に、一枚の扁額がかかって居ります。ヨコ四尺九寸八分・タテ九寸六分厚さ約一寸の櫨板で、文字は彫り文字で緑青が入っている仲々立派なものであります。中央には横書きで、「無為化堂」大書してあり、末尾に「大正九年十月十七日 当山三十九世是祥浄書」とタテに割り書きされて居ります。

これに依つて、現鐘楼は大正九年に建てられ、同年十月十七日落慶・撞き初め式が行はれたことがわかります。

当山の先住三十九世是祥方丈は、姓を鳥海といひ、明治二十七年、三十八世中興黙庵道悟方丈急逝のあとをうけて、岩手県東磐井郡興田村竜門寺より当山に晋住された方ではありますが、元来が学究肌の人で、漢学・詩文に長じ、多数の子弟を養育されましたが、時代が時代とて伽藍の営繕等はあまり意に介せぬ方のごさいました。

併し、晩年にいたり、長泉寺ほどの名刹に鐘楼のないことを残念に思い、畢生ひっせいの事業として、これが建立を発願し、檀信徒の御協力を得て、大正九年つ



▶ 鐘楼の扁額

いに念願の鐘楼を完成するに至ったのであります。

当山四十世説宗方丈は、私の先師であり父親でもあります。先師は幼少の頃佛門に入り、長じて大正二年に当時の曹洞宗大学林（現駒沢大学）を卒業するとすぐ神奈川県高座郡田名村（現在の相模原市田名）の宗祐寺という寺の住職となり、大正四年、縁あって妻（是祥方丈の娘きみの）を迎へ、爾来、大正十一年に当長泉寺に転住するまで、かの地ですごしたのであります。是祥方丈は、鐘楼建設の議起るや自ら京都に出向いて、重さ百貫目の梵鐘を注文し、帰途、宗祐寺に娘夫婦を訪ねて一泊し、「喜んでくれ、長泉寺にもやっとな鐘楼が建つことになった。これは儂の一生の大仕事になるだろう」と、しみじみと申されたということ。扱、現在の鐘楼は、地方では珍しいハカマゴシ方式の鐘楼で、四本の柱には杉の丸太を用いてあり、あまり立派な鐘楼とは申せませんが、垂木は扇垂木とする等、各部に吟味を凝らした、苦心のあとが見られます。

棟梁は町内東仲町に居住していた坂元隆左衛門という人で、石工さんの名は遺憾乍ら解って居りませ

ん。

この鐘楼について特筆すべきは屋根瓦であります。棟に鯪をあげ、四方の下り棟に竜を配した瓦細工は、実に見事なものであります。これは当時イキモノ作り（瓦職人の仲間では、細工した瓦類をイキモノと称し、これを作る職人を特にイキモノ師というそうです）の名人だった、小田暮坪の清水四方太郎氏の作で、清水さんはこの瓦を作るのに、小田長瀬世ヶ崎あたりの粘土質の土を用い、これを寒晒しにし更に、白でこびき精魂こめて練り上げた生地を丹念に焼き上げた、一枚すぐりの素晴らしいもので、しかも一坪あたり百二・三十枚葺きかと思はれる細かい瓦です。

近々、鐘楼を改築しようとする時、この瓦をどうするか、大きな問題になるかと存じます。

もとの鐘と現在の鐘を比較した場合、鐘楼改築ということになれば屋根面積は現在の三倍ぐらいにはなりそうなのに、その反面、瓦のスペアは全然ないのであるから一体、この瓦を保存しようとするかどうか、再使用出来るかどうか、

思案にしてくれることもあります。

ともあれ、こうして念願の鐘楼も見事に出来上り、大正九年十月十七日、観音様の御縁日を卜して、落慶・撞初め式が盛大に挙行されました。

当時の頃をよく覚えて居られる古老によれば、当日は晴天のもと、是祥方丈様をはじめ多数の御寺院様、それに関係の各位、多数の参詣人で山内は終日賑はったようでございます。

特に、町内の総代さん方の妙齢のお嬢さん三名による撞初めは、この日の圧巻のようでありました。

西仲町の松本先生、天神町の笹森総代さん、それに東仲町湯村総代さんの各令嬢、即ち、松本たみ子様（当時十五歳）、笹森たか子様（当時十五歳）湯村文子様（当時十二歳）の御三方がそれで、当日のいでたちは、揃いの白無垢の着物に緋の袴をはき、白いハチマキ姿のタスキ掛けで、夫々、男衆の介添をうけて、たみ子様は七聲、たか子様は五聲、文子様は三聲を撞かれたそうで、その凛々しくもあでやかな御姿は、今もはっきりと覚えておいでの古老もあり、当時、町内外の語り草となったようでござい

ます。

尚、御三方のうち、松本たみ様はその後、不幸に病歿されましたが、笹森たか様は目黒に、湯村文子様は佐々木に、それぞれ姓がかはり、今も至極お元気で仙台市台ノ原と古川市にお住まいでございます。



かくして、是祥方丈の悲願のもと、大正九年十月十七日、当山鐘楼の落成・梵鐘の撞き初め式も無事終り、爾来、約二十五年の長きに亘って数多くの修行僧によって鳴らしつがれ、除夜は申すに及ばず、朝な夕なに、佛の妙音を寺から里へと伝へて参りました二代目梵鐘も、ついにその姿を消すことになりました。いうまでもなく、太平洋戦争の激化に伴う金属回収令によるものです。

あの頃、一般の御家庭でも、火鉢、貴金属のるい、果ては蚊帳の釣り手までも供出させられたイヤな思い出をお持ちの方も沢山おいでになります。当長泉寺に対しても昭和十七年晩秋の頃、梵鐘・金灯籠等の供出命令が下りました。当時の至上命令とて逆

らうすべもなく、寺では昭和十七年十二月十三日、例歳御開山忌に併せ梵鐘撞納め法要を厳修し（当日は総代世話人さんをはじめ各区長さん方、地元の有志など約百五十名の方々が参列、鐘との別れを惜しみました）、こえて昭和十八年一月十二日、是祥方丈が心血をそそいで再鑄した当寺二代目梵鐘は、昭和八年本堂屋根銅葺替大改修を祝って献灯婦人会の方々が奉納して下さった本堂前の八尺余の唐金大灯籠一對ともども、ついに還ることのない壮途に旅立ったのであります。

先住説宗方丈はその日の感慨を別掲の如き偶感詩に託し述べて居ります。

私はその頃、まだ年も若く、しかも学生の身であり、深い考へもなく、ただ漫然と「あゝ鐘ももって行かれてしまったか」と思ったくらいのものでした。

併し、昭和十八年十二月思いもかけず、海軍に入り、在隊一年九ヶ月、やがて戦も終り、復員してその後次第に気持も落ち着いて来た頃には、夕方など鐘のない鐘楼を見上げると何とも言はれぬ寂しさを覚えてたものでした。

それ丈けに当時の最高責任者としての、先住説宗方丈の感慨は察するに余りあるものがございますし、それ丈けに、昭和二十四年の秋に、台山の梵鐘の移管が実現し、やがて撞初め式を行ったときの喜びも一入ひとしおだったろうと存じます。

説宗方丈は、その日のことを左の如く日記に誌して居ります。

「昭和二十四年十二月十三日

例歳開山忌因ミ梵鐘撞初式・結けつ制法座修行、随喜寺院二十五、

来会者二百余名（招待数三百二十）

晴天に恵まれ盛況を極む、当日

の経費約十万円を要せり」

因みに当日の結制法座の首座しゅそ（俗に言うお長老さん）は現在の金津西円寺住職石山俊雄師であり、又、撞初め式は、大正十二年以来、毎年除夜の鐘並びに三朝大般若の鐘を撞きつづけて来た、当寺の植木屋渡辺勇松さん（故人）によって行はれました。



應召巨鐘波大瀛  
善男羅拜祝祈情  
齊懃夷敵清東亞  
此碑破却鐘入荒

▶ 梵鐘應召に際し先住説宗方丈のものした偶感詩

+

## 祖母・母の思い出

角田・北町 中村正士

祖母まつよが、昭和三年六月十日、財団法人生活改善同盟会より表彰を受けた時、「今まで五十年間も鐘つきをつづけておる」と云ったのを聞いておりますが、そのことから考へて逆算してみると、鐘を撞き始めたのは、明治十三・四年頃と推定されます。

大正十二年五月三十一日付で、母さわが役場からいただいた辞令は、今もありますが、祖母まつよの時代には、役場の辞令は出ていなかったように思われます。

毎日、朝の六時から午後十時まで、一日に十七回も坂道を往復して、雨の風の日も一日も休むことなく、六十年余の間、戦争がはげしくなった昭和十九年頃まで、撞き続けて参りました。

一時間毎に撞くので、その間に外出しなければならぬ時など、大変に不便を来たすこともあり、誠

に苦勞することもあつたようでした。

今にして考へると、六十余年という長い間、よくも鐘を撞き続けて来たものだど、祖先達の勞苦に感謝する現在の心境であります。

若くして逝つた、かくれたる郷土史研究家であつた吾妻栄行氏は、その著「角田町史稿本」の中で、旧跡台山の項に「時鐘ハ寛文元年石川宗弘鑄造シテ氏神八幡社寄進セルモノ毎朝六時ヨリ夜十時迄ノ時ヲ報ジテ良ク数里ノ外迄達スル田園二耕スル農民ノ利便思フテ余リアル」と述べて居りますが、いまは亡き祖母・母の面影と共に、なつかしいあの鐘の音を、あらためて偲んで居ります。

(昭59・2・20・記)

中村ぎわ

時鐘撞ヲ命ス

但シ月給七圓ヲ給與ス

大正  
五月廿一日



角田町役場

角田町役場

▶中村さわ殿が町役場から  
うけた辞令

## むすび

以上、長々と申し述べて参りましたが、とにかく昭和二十四年の暮、台山の鐘は長泉寺三代目の鐘として生れ替り、爾来、照る日も曇る日も休むことなく、無説の説法をつづけて居りますが、再三申し上げて来ました通り、供出した二代目梵鐘は重さが百貫目であったのに較べ、現在の三代目梵鐘は推定二百四・五十貫という巨鐘であります。

従って、鐘に比してお堂が小さく、かてて加へて、現在の鐘楼は主要木材、とくに柱が杉材の為、一部は既に根継ぎしたものもあり、建造後六十五年を経た今日、老朽の度合いも次第にひどく、お堂全体が著しく東に傾いてきた為、去る昭和五十六年春、丸森町窪田実氏の御芳志による廃電柱六本を以て、おついで應急の補強工事を行い、現在に立ち至っているのです。まず。

先住説宗方丈は生前、口ぐせのように「うちの鐘

楼もあと四・五尺南に寄っていれば、寺の景観も一層引き立つのだがなあ」と申して居りました。

生涯のすべてを子弟の育成と長泉寺の復興に捧げ、昭和二十九年四月、卒然として六十七年の生涯を閉じた説宗方丈の三十三回忌も、目前に迫って参りました。

それやこれや考へ併せ、役員各位ともしばしば御協議申し上げた結果、近く、昭和六十一年四月落慶を目途に、鐘楼を改築させていただきたく念願しているところでございます。

どうぞ、檀信徒の皆様、

豊かな心の風土と、長い歴史の上に成り立つ我が長泉寺をして、層一層、莊嚴ならしめる為に、将又、鐘一つにまつはる数多くの方々の善意と遺芳に報いる為にも、何卒、一臂のお力をお貸し下さいます、立派な新鐘楼をお建て下さいますよう、御懇願申し上げます、つたない「鐘ものがたり」を終わります。



想いおこせば、今を去る四十一年の昔、昭和十八年初夏、義兄坂内泰貞が広東方面で戦病死した為、

図らずも当時二十二歳、まだ駒沢大学在学中の身であつた私はその寺の後任に擬<sup>ぎ</sup>ぜられ、同年八月に栃木県佐久山町福原の永興寺の住職に任ぜられ、更に昭和二十九年、先住説宗方丈遷化のあとを承けて当長泉寺に転住してから、春秋ここに幾<sup>いく</sup>星霜<sup>せいそう</sup>、いつしか還暦もすぎ、宗門寺院の住職歴も満四十年を過ぎ、又、長泉寺住山も間もなく三十周年を迎へようとして居ります。

時の流れの早いのに今更乍ら驚くと共に、顧みて、何ら為すべきものなかつたことに心中深く恥入っている昨今でございます。

ともあれ、私の人生に於ける一つの節目でございますので、先住方丈の遺芳に倣い、「住山三十年記」でもとも思つたのですが、資料の蒐集・分類もまだ十分でなく、又、次の節目まで、未だもちそうな気もしますので、このたびは見送ることにいたしました。

従つて、この『鐘ものがたり』は私の住山三十周年の記念のつもりでもございます。

尚、この戯文を草するに当り、数多くの人々、特

に左の方々にいろいろお教へいただきました。記し厚く御礼申し上げます。

神明社宮司佐藤清茂・愛宕神社宮司渡辺英雄・刈田嶺神社佐藤定保の諸先生、溪水寺住職穴戸義一・大蔵寺住職小畑秀伍・斗蔵寺住職石川運義の諸師、角田市東南町菅野敏夫・西田町小川とし・谷地町石川好光・寺前佐藤左佳利・北町中村正士御夫妻・本町中原春吉・野田永井かほる・東仲町松岡泰二・東田町佐藤弘・南木沼中村太彦・北江尻米山俊夫・栄町吾妻武一の各氏。その他大勢の方々。

以上。

鐘ものがたり

昭和五十九年四月一日印刷全刊行

著者 奥野泰弘

発行者 長泉寺

長泉寺  
鐘楼改築  
実行委員会

印刷者 栄光騰写堂

(非売品)



(参考)

現在の鐘楼



八幡神社



観音堂山

